昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二七六号）

慈光

第二十四巻　第五号

目次

信仰の正定、邪定、不定……近角常観……(1)
争いと和らぎ……福島政雄……(6)
人生随想二つ……柳瀬留治……(9)
一道会の記……榊原徳草……(12)
念仏詩抄……木村無相……(17)
新宗教と真宗……花田正夫……(20)

638.4
⓪

信仰の正定、邪定、不定

近角常観

本日の講題は信仰の正定・（しようじよう）邪定×（じやじよう）・不定（ふじよう）であるが、親鸞聖人は、信仰上にこの三つの差のあることを明らかにせられた。化身（けしん）土巻の表紙の裏に

至心発願之願　邪定聚の機
雙樹林下往生
至心廻向之願　不定聚の機
難思往生
至心信楽之願　正定聚の機
難思議往生

以上の三つが真宗の教義において三願三機三往生とて大切な事になってあるのである。

さて私共の思想の上において如何なることをすべての人人が考えているか、此処では弥陀の本願とか、仏教とか、真宗とかいうことをまず措いて、私共は生れはじめしより如何なることを考えているか、先ずこの問題から話をはじめていこうと思うのである。

あまり説き過ぎた言い方であるかも知らぬが、この化身土巻において最も眼を注ぐべき文であるところの

「悲しい哉、垢障（くしよう）の凡愚、無際よりこのかた助正間雑（じよそうかんぞう）し定散心（じようさんしん）まじわるが故に出離その期なし。自ら流転輪廻をはかるに、微塵劫を超過すれども仏願力に帰し難く大信海に入り難し、まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし」

この垢障の凡愚とは、罪深く障り多き煩悩具足の凡夫ということであるが、ただこれだけなら解り易いが、その次の助正間雑し、定散心まじわるが故に、とあるのは一寸解り難いであろうが、これをわかり易く言うと次の如くになる。

私共の考えにおいて、善をせねばならぬ、悪をやめねばならぬ、善ければ人が賞めるし、悪ければ人が憎む。この

考えのために、人々は困るのである。善は為すべし、悪はなすべからずとの原則の下に迷うているのである。際立てて言うならば、私共の生れながらの心は常識より云うも、道徳より云うも、何れの方面より云うも、善はなすべし、悪はなすべからず、と云いつつも、それが徹底せずに、同じことばかり繰り返している。真宗の信者などは「罪悪よりも自力がいけない」など云うが、その自力とは、善をやるのだ、悪をやめるのだと努力しているのがみな自力である。この自力というのが青年にとって悪いどころではなく最も好ましい事であって、むしろこの一道に向って進まなければならぬとなっている。

今日一般の社会問題、思想問題、政治問題より言って見ても、表面より景気のよい体裁のよい立派な方面にのみ手をつける事に努力し宣伝しているのであって、それによって種々な問題が起っているのである。私共が無始曠劫よりこのかた迷いに迷って来ているのは、やはりこの考えがもとであったのである。

ところがこういう善いことを私共がいよいよ実行して行くとなると、どういうことになるか。私自身が久しくやって来た経験をもととして言うならば、私ども最初より「悪をやめるのである、善を行うのである。宗教のために尽すのである」との考えのもとに長らくやって来たものである。その時の私の思想の中心、特長は何であったかというと、善は皆行い、悪は皆廃める考えである。これを化身土巻の語にひきあてて考えて見るとよく解るのであるが口先では「朝から晩まで罪を造っています」というけれども、ほんとうの考えはよいことをしている積りであって「なるべく人にも親切にする、人のために尽す」とこればかりで人生の生活をしているのである。邪定聚とはこのことを云うのである「我こそは正しい、善いのである」と思っているのが邪定聚である。

本日より七日間、信仰問題につき諸方面より話も出来、いろいろの御たずねも出るであろうが、最初の出発点はいずれもこの邪定聚に外ならぬのである。特別に自力的の戒行などの修行をするのではないが、その考えの内容は何れもやはりこのようになっているのである。

今日の話は十分に平易に言っているのであるが、もう一歩進めて、その後の私自身の経験は、どうであったかを云わねばならぬ。私は子供の時からどう考えていたかというと「学校に行って勉強せねばならぬ、よく出来れば、人に賞められるのである。宗教のためにも尽くさねばならぬ」と、学問上、宗教上、信仰上、乃至社会上にも、善く努め尽すのだとの考えをもって、久しく継続したのである、善くするのであると身も心も力の続く限りやって見たのであ

る。ところがそこになって気のついたのは「自分はこのように正しく努力しているのに一向に人はそれを認めてくれない。人が認めてくれないのならば、一生懸命につとめて見てもその所詮がない。人々は自分の名利のために動き、勝手なことをやってばかりいて何等のまことともないのに、自分だけは犠牲的に献身的にやっているのだが、考えて見ると世の中は強いものが勝ちだ。世間は冷やかである。人は濁っている、自分は落目だ、何だ、彼だ」といろいろの考えが出て来たのである。

そうすれば次にはどうなったかと云えば、はじめの私の理想である、善いことをする時には「如何なることにも不足は言うまい、闇より闇に葬られても決して愚痴は云うまい」との考えであって、勿論人に認めてほしいなどとは考えても見なかったのである。一言で云えば、私の考えの理想は絶対であったのである。それが絶対に出来る積りであったのである。この絶対とは「何処までいっても不足は言わない、人が憎まば、その人の遂に恐れ入るまで親切にやって行こう」という考えであった。

ところがこれでやって見ると遂に身も心も疲れ果ててしまった、すると意外にも、自分はかくまでやっているのに人は認めて呉れない、人が感ぜぬとならばやる所詮はないと、以前に自分の考えていた善は何処までもやるつもりであったのが、実は絶対でなく、相対であった。ここは大いに注意せねばならぬところである。

極く通俗的に云うならば、真の絶対のまことならば、如何に誠でないものに向うても、それを決して悪く思わぬというのでなくては真のまことではないのである。親鸞聖人の真実とは如何なる不実なものにも、こちらは真実をもってむかい、更にその不実を悪く思わないばかりでなく、その不実の恐れ入るまでまことをもって向かうというのでなければ、真実とは言われぬのであるが、そういう真実は私にはない。そういう真実をもって理想的にやろうと思って見ても結局はやれないところに突き当るばかりである「自分は善いことをしている、信心をしている」という善であるならば、そのためにかえって、苦しみにおちいるのである。

今日は、宗教、政治、実業上で、今いうような問題が著しく出ているようである。私はこの化身土巻を拝読して見ると、実に奇異の感に打たれる。この問題は如何に解決されるかと困っていると、その次にはその解決の道が説き示されているのである。実に不可思議の感がするのである。

一昨年の夏季求道会の時には証巻であって、仏の恵みの人生の上に顕わるるところを頂いたのであった。かくて会の終わって後に子供が死に、母が亡くなって人生何等のも

のもなくなったのであるが、ただ仏の真の恵み一つを喜ばせて頂くとのことになって、昨年の夏季求道会をやらして貰ったのである。しかもそれがまた子供の病中であって、人生実にこの真仏土（しんぶつど）あるのみと喜ばせてもらったのである。

今年は私自身の上としては無事であるけれども、社会上思想上の不徹底は実にいちじるしくあらわれて来たのである。これまでの一般社会の傾向は、信仰とか、思想など云うことにあまり眼をつけず、また理想などもあまり言わなかった時代であったが、今日になって見るとすべてが不徹底のままに残されてある如き感がするのである。この感じをうまく云い表わすことは出来ないが、精神上の問題は精神的になるほどと合点が出来なければ駄目である。こう云う際に化身土巻を心から読ませて頂くということはすこぶる意義深いことであると思う。

親鸞聖人が教行信証を書かれた時代にも、念仏の声は津々浦々に聞こえたけれども、聖人より見れば化身土巻のはじめにあるように

「しかるに濁世の群萌（ぐんもう）穢悪の含識（がんしき）いまし九十五種の邪道を出でて、半満権実（はんまんごんじつ）の法門に入ると雖も、真なるものは甚だもって難く、実なるものは甚だもって稀れなり偽なるものは甚だもって多く虚なるものは甚だしげし」

である。それはみな「自分は善いが人は悪い」というのでそれで迷うて苦しんでいるのである。

「自分は善いけれど人は悪い」とて苦しむ人が多い今日の思想界はみなこれである。いささか云い過ぎるかも知れぬも「日本はよいが外国は悪い」となり、資本家は資本家を以て善しとし、労働者は労働者を正しとして相争うている。近頃の総ての思想はこれになっていないものはないのである。

そこで大いに注意しなければならぬことは「我よし、人悪し」でやっているのならば結局争いばかりであって信仰問題とはならぬのである。「自分は善いのだ」と云っているが、それが本当に善いのかどうか、私はもと絶対的に善くせんとの考えであったが遂にそれが出来なくて困ったのであった。双方で「善いのだ、悪いのだ」とて引き合っているのである。その時に気のついたのは

「自分はこれほどよくしているのに人が認めてくれないとか、自分は誠をもってやっているのに人は不誠であるとか云っているけれども、自分は犠牲だ、献身だといって見ても、人が人がといっているのではそれは真の犠牲でも献身でもないのである、これはいけない」

となったのである。

近来の御来聴下さる方々のうちには、真宗の教を聞かんがために来て下さる方もあるようであるが、そういう方々に特に言いたい。真宗の信者が「罪が深い」などというのは、私共が腹を立てるからとか、欲が深いからとか云うけれども、真に悪いのは、自分が善いことをしていると思っていること、それが悪いのである。「自分が悪い」ということは坐禅や観念をこらすことが悪いというよりも、自分が善いことをしていると思っていること、そういう自力が悪いのである。私はそこに気がついた時は、立っても居ても居られなかったのである。

自分がこれまで、世の中が悪いとか、教会がいけないとか、宗教のために、社会のためになどやっていたのも、実は、わが思いのために尽していたのである。キリスト教の者はキリスト教のため、日蓮宗の者は日蓮宗のために尽すというのと少しも違いはないので、自分のために〳〵とやっていたのに過ぎぬのである。

ある方が「私はキリスト教に対抗して大いに仏教のために、真宗のためにやろうと思っています」という。「それは感心出来ない」、「なぜですか」と云われたことがあった。私もはじめはそういうようにやるのが正しいと思っていたけれども、それなら「俺のため」と云うのと少しもちがいはない。故に「念仏しているからよい」「控えているからよい」という念仏のご信心は用心せねばならぬ。私はこれが砕けてしまって困ったのであった。ここに逢着（ほうちやく）如何ともして見ようがなかった。私が言い張るだけ相手も云い張る。これは五分五分である。私共の絶対だと思っていたのは皆相対であったのである。こうなると今までよいことをしていたと思っていたのが皆砕けてしまうのである。これが邪定聚である。これは本当に徹底したものではない、むしろ誤りの方に徹底しているのである。

全体、仏教の上で、正定、邪定、不定などというてあるが、親鸞聖人が邪定といわれたのはかくの如くに自分が善いことをしているのだとて押し立てて行くのを指して邪定聚といわれたのである。この邪定聚ということを宗乗の上に専問的に説明すると何でもないことのようだが、人生の問題としてこの如く間違える、見当違いにやっていることが邪定聚の機である。

× × × × × ×

法華経義疏舎利弗よ、まさにしるべし。

我れ仏眼をもって観じて六道の衆生を見るに、貧窮にして福徳智慧なく、生死の険道に入りて相続して苦悩たえず深く五欲に着して犢牛（こうし）の尾を愛する如し。貪愛をもって自らおおい、盲冥（もうめよう）にして所見なく諸仏の法、および断苦の法を求めず、深くもろもろの邪見に入りて苦をもって苦を捨てんと欲す。

この衆生のための故に、われ大悲心を起しき。

争いと和らぎ

福島政雄

人間には闘争本能があると心理学者は言う。知られている限りの人間の歴史は闘争だらけである。我が国の現在の社会の有様もそのとおりであって、争いまた争いである。

この争いを和らげ止める道は無いのか。古今東西の聖賢の教は皆平和を目ざしていると言ってもよい。キリスト教では天に栄光、地に平和という。儒教でも仏教でも四海兄弟と言っている。人類という中でも文化民族と言われる社会の人々は、何れもこれらの教の何れかに触れている。しかも平和はなかなかこの世に実現せられず、血なまぐさい戦もあり、また社会の各層の間のぎこちない争いが断えそうもない。

その争いの根元は何であるかと言えば人間の欲である。欲と欲がぶつかる、そこに争いが起る。北洋の漁業、南氷洋の鯨狩などでも欲と欲がぶつかる原因となる。そこに争いが起りやすい。仏教では五欲という。財、色、食、名、眠の五欲である。人間である限りこの五つの欲を持たない者はない。今日は権利を主張する世の中となっているが、生きる権利というようなことを主張して、互に欲をほしいままにすれば、この世の中は永遠の戦場となるより外はない。この頃は道徳問題がやかましいが、生きることが道徳であるなどと無茶なことを言っている人もあるという。生きることを両方から主張して、譲るということが無ければ、結局死ぬるか生きるかの争いが絶えないということになる。争うことが道徳ということになるかも知れない。こんな道徳はない。

道徳ということは人間が平和に共存する道でなければならない。相手を圧迫して、或は殺して自分ばかり生きて行こうとするような人間は不道徳な人間である。平和に共存するためには互に自分の欲を節制して相手にゆずるところがなければならぬ。そこで寡欲とか節制とかいうことが社会人としての大切な徳となるのであるが、それがなかなかむつかしい。欲をひかえて相手にゆずるということは、今

日の社会に行なわれていないと言っても過言ではあるまい。自分の欲ばかりをむやみに満足させようとする。そこに今日の社会の何とも言えない暗黒面がある。それで争いは続いて行くのである。

欲を制するということだけでも道徳の人となることは実にむつかしい。弱肉強食ということは前世紀の生物学の原理で、今世紀になってからは、共存共栄ということが原理となっていると、その道の学者からきいたことがある。併し今日の人間社会の現状はどうであるか。権力や武力をもって弱きをしいたげるということが常に行なわれているではないか。

道徳の教だけで社会を立派に整えて行くことは不可能である。宗教の世界が開かれなければ社会は救われるものではない。その宗教の中でも仏教、仏教の中でも親鸞教が大切な意味を持つ。親鸞聖人の教は欲を中心とする人間の徹底的自覚反省の教である。反省と言っても自分の力で反省するのでなく、仏陀の心光に照徹せられた自分の姿を徹見させられるという反省である。云わば反省ならぬ反省である。

我々は欲をほしいままにしながら自分は無欲であるなどと云っている。自分はひかえ目にしているなどと言いながら、実は相手の欲に対して反感を起こしている。ここから争いが起って来る。此の根本の自分の姿にはなかなか目がさめないが、そこを鋭く教えられるのが親鸞聖人の教である。

貪、瞋、邪、偽、奸、欺、百端という善導大師の言葉を借りて、聖人は自分の姿を言いあらわしていられる。愛欲の広海に沈み、名利の大山に迷うているという痛切な告白もある。心は蛇蝎のごとくなりとも言われ、名利に人師を好むとも懺悔せられている。それは自分は欲のかたまりであるという告白であり、懺悔である。それは仏の心光に照らされた自分の姿を述べていられるのであって、極めて自然な無理のない心持から述べられているのである。

此のような自覚が平和の根元となる。それは悲しみの自覚である。自分を悲しむ告白である。此の心境に住する人々が寄り合えば、そこに和らぎがある。争いは消滅する。自分ほど寡欲の人間はないなどと考えている人々が集まれば、必ずその間に争いが起る。自称善人の間には争いが断えない。併し聖人の心境は更に深い。自分は自分を善と思いあがる心が止まない。なかなか自分を悪人と思えない心境、それほど自分は驕慢であるという深い反省であり、内は愚であって外面は賢人ぶるという反省である。善人なをもて往生を遂ぐ、況んや悪人をや、と云われても、善人とは聖人御自身のことであり、悪人とはすなおに自分は悪人

であると反省している人である。この聖人の心境に至れば、一切の人々の前に頭がさがる、真に謙虚な心境である。

我々は自称善人である。それで我々の間には争いが断えない。自分は善人であると主張して何等の反省もない。自分は自分を善人としか思えない。それほどに自分は虚偽な人間であるという心境まで心が深くなれば、争いの心は融けて行く。そこには仏の悲願が我々のいのちの底に徹して来る。争いの心がなかなか止まらない此の自分を自覚せしめられ、仏がその我れを悲しみたまう慈悲が徹して、我々の心に悲しみが染みわたる故に、争いの心がいつの間にか融けて行くのである。

和らぎは此のようにして此の人生に出現する。争ってはならないとおさえつけたのでは駄目である。怒りの心をおさえつけて尖った声で称名する人があったとしたならば、称名は怒りの表現であるということになるであろう。そんな称名は無い。念仏称名というのは無理のない自然法爾（じねんほうに）のあらわれである。仏心の応現である。心が融けるにつれて自然にうかび出る声である。それは永遠の平和の記号である。怒りの心や争いの気分の止まない我々を徹見して、そこに無限の悲涙をそそぎたまう仏陀の声であり、此の仏陀は永遠のまことのいのちであり、我々の争いの心の底に徹してこれを融かさずに止まぬ心光である。そこに此の人間社会の争いを融かして行く永遠の和らぎのいのちがある。

（昭和四十七年三月二十四日）

眞諦

（筑紫野春草）

極めつくしあますなしとそ詮示したり若かりしかな今にし思へば

一流の真諦は正にこれなりと説ききかせたり友にも大衆にも

聞く所を喜び且つは得るところを嘆ずるのみとその謙虚

（御本書を拝読して）

有所得

たのみつつやすらぐものとほこりしはなべてはかなき有所得の見

これなりと握りしめたるわが真理なべてはかなき有所得の見

幾度か握りしめたるまことはや若存若亡の有所得の見

無所得の八不中道遠しとほし有所得見を今知らされて

人生随想

柳瀬留治

一、大道無門

大道とは人格達成の道で、心ある者の辿るべき道であり門は家屋の外囲に附した出入口で、出入りを制限するためのものである。この一句、大道には入出を制限するような門などがあるべきでないとの意である。

門には威厳や飾りの心持もあろうが、官庁、学校、邸宅などでは出入りを制限する意が多分にある。古い城廓などでは防備上のもので、中国など古く城を中心に民家を廓壁をもって囲み、城門をもうけ、賊の浸入に備えていた。平和な日本の庶民はいかめしい門などをあまり好かぬ風があったが今日は玄関となり、それも閉している。玄関も等しく門関の訳である。

師を求め教えを乞うことを入門するという。又入学するのを校門をくぐるという。一定の資格がないと許されないわけである。又、僧になることを仏門に入るといい、各宗のことを宗門という。芸道も入門といい、短歌では白秋門下、空穂門下などという。こうした人間達成の大道に門関を設けて条件をつけて入出を制限すると、中が窮屈になり萎縮沈滞して清新さを欠いてくる。中味の実質さえ偉大であり、深遠であれば心あるものは入らざるを得ぬはずで、また心なき者の去るのもよい。目覚める時あれば再び入り来るはずである。

わが近角常観先生も門を排して信を説かれた一生であった。「大道無門」の句は、中国の宋の時代無門慧開禅師が禅の公案を集めた書物の『無門関』の扉にある句で

「大道無門、千差有路、透得此関、乾乾独歩」（大道無門、千差の路有り、この関を透得せば乾坤独歩ならん）とあるもので、要は関を透得することである。ここでは禅の空を透得するので、すると乾坤、即ち天地を自由自在に濶歩出来る身となるの意である。更にいえば、相対の人間生活では利だの害だの、善だ悪だのにこだわる。その相対の

門関を排した無にめざめると自在に大道を独歩出来るというのである。

これを作歌の道に移していうと、我々は利害だ面子だ義理だといった、ごたごたしたものにわずらわされて、濁り澄んだ詩が生まれないのである。心の鏡に世の埃が積って澄んだ影が映らないのである。それを払拭して無になれば有りのままに来るものは影を投ずる訳である。

感を統一するとか、心を澄ますとか、いわれる。そした作歌の態度の大本を大道の上から大道無門といっているものと解される。道は一なりといい、達すれば何れも一に合するといわれる。何もよい歌を作るためなどでなく、達した心の基盤を得ることがお互いの根本であり、それが得られると世にこだわりなく至極自在に生きられる。その大道を歩む。これにました幸福はあるまい。

二、俺は既に死んだのだ

二十七歳の七月、私の自我の求める所が絶体絶命に立ち至り死んだのである。「人生随想」にも書いたように、長らく人生暗路の光として求め来った信仰も絶望、生活上でも同僚間孤絶に陥り、夜を凌ぐ臥場さえなくうろつくに至った。たまらなくなって近角先生の許へべそをかいて行った。

その絶体絶命の私を救ってやろうと真剣に話して下さるが、私は石ころ見たいに心が冷えて感覚を失って、「聞こえません」と云った。先生は「音波しか聞こえぬのが君の耳だよ、その石ころになった君を石ころと見た仏は、信ぜられぬことも喜べぬことも御承知の上で、踏まれ蹴られしている路傍の石ころを憐み、拾って運んで下されるのだ、頼まれもせぬのに」と仰言る。私はその言下に「仏とは念仏とはそのことか、」と泣けたのです。

人生の光も希望も絶し自我の小舟が没し去り、先生の船に手を取って乗せられたのです。これが私の自我の命終であった。親鸞聖人が「前念命終、後念即生」といわれる。己が死に、そして恵みに帰ったのである。禅家で云う「大死一番絶後に蘇る」というた劇的なはでなものではない。永らく迷い来たった自我が倒れ、御心に蘇ったのである。この慈しみの光に汚い腹臓、吐き切れない胸の泥の限りが、泌々と照らされ、歓喜が湧き、己の醜さをあやまり、唯々仰いで光を嘆じ、伏して謝すのみであった。

かく己の汚いものの凡てを摂し取られて見れば、もう偉ぶる要もなく、又己れの醜さを憂うることもいらず、持って生れた凡夫そのままに生活が出来て、誠に肩が軽く、心すがすがしく何だってやれる。信仰といっても向う様がやろうというお授け物で、こちらの手柄でないのみか醜い

恥（は）ずべきものばかりなのを憐んでのことです。又は凡夫で、中の中まで炭粉で出来た炭団玉である。ただ先生に火を移され、その一片に至るまで全部火になり、熱を発している。灰になり終るまでぼかぼか温いであろう。

世の人々よ、己の炭団玉が己を冷やし触れる人を汚し、人生を寒くしているのである。宗教とは信仰とは己の炭団玉に気付く所にある。

人間はみな炭団玉であることは当り前だとし、又死に対しても無常に対しても動物死でよしとしているであろうか、我々が生きん為働き続け悩みながら終る。その可哀相な己、その人生に驚きを立つべきではないか。

彼の西行も己が人生の甘い夢に酔って世の無常に驚きを発しない事を、

いつの世に長き眠りの夢さめて驚くことのあらむとすらん

と詠んでいる。「いつの世」は来世か来々世で、この世では「驚」即ち夢が覚め悟れないものと断念し、生れ変っての来世に願いをかけていた。だが念仏は他力即ち仏力によるので、私さえ夢が覚めたのだ。誰でも覚めてさらりとした新生の朝が迎えられる筈である。

詠　草

八十になりて

逢ふ嬉し語る嬉しく酌みゐつつ危く涙こぼれなんとす

八十の老と遂ひになり生ける内に幾たび逢ひ得むかかなしきものを

顔見れば心の足りて言ふあらね別るとなれば胸のむせばゆ

傍へ人を越にゆかしめ八十二のわが親鸞のさびしくましけむ

春草君を偲ぶ

必ずや君は仏土に在さめど便りを交す道のあらざる

念仏の中に君住めり相逢はむ道は唯々念仏にのみ

敬老の日

知らずあれば今日は敬老の日なりといふ。おぢいちゃんおめでとう、プレゼントよと二人孫の差出す見れば、上の孫は咳によき飴、下の孫のくるるを見れば、可愛ゆきリボン付けしハンカチ、有難う有難しよな、この爺を慰めむとのよき贈り物。

お爺ちやんお茶よと呼ばれ、階下りて茶室に入れば、わが席と大き座布団、眼驚く寿の文字織り出せるもの、これはも老慰むと都庁より賜びたりという。はにかみつつ我の坐るに、ふかふかして心ぬくもるよき老の日ぞ。

一道会の記

榊原徳草

次いで、**川畑愛義先生**の御話があり、その大要は次のようである。

こちらにお伺いする時にフト思うたことが二つある。一つは一道会は好い天気の日が多い、西元さんも云っていたが、榊原さんの精進がよいんかなあと。も一つは、ここへ来るのに道を一遍も間違わずに来た、自分ながら感心したこと、それ位のことです。

ここへ何で来るかというと、昔懐しい人々に会える、誰かに会える、という位で…。ここでかしこまって話をさせられるのはこまったことですが、切角来たのだから此頃考えたことを話してみるのもよかろうと思って申しましょう。

花田先生が来られませんでしたが、実は一週間程前に一道会でお目にかかりましようとはがきを頂いていたんですが、本当に一寸先は解らない、何が起るかわからんですね。

先に西元さんが紹介した「ありそうなこと」あれは「ありそなこと」と池山先生は云われた。そう云わないと先生の実感が出ない。何だってあり得ることだし、何だって考えられんことはないと、こういう事だろうと思う。それは本当にお互に一寸先はわからないということだろうと思うんです。

私が池山先生の印象として残っていることは、先生は妥協されない純粋な方だということでしたが、今日来る途々先生のイメージを追って参りますと、今松本先生が言われた悠容迫らぬ寂（しず）かな先生というものが強いです。蓮華谷のお宅におられた先生、おおむね従容として寂かなお態度、お姿勢でいらつしやる。

私は今、公害研究所に居ますが、騒音というのが現代の我々の生活の大きな障害になっておる。先生の様なああいう寂かな方にお会い出来たということは、これは大変なこ

と、有難い御縁だったと私は思っています。

さて、話は思いつくままに申すんですが、公害と云いますと被害意識しかありませんが、結局は公害というものは人が起している。騒音とか、有害ガスとか色々ありますが、加害意識を我々が持たないことが片手落ちじゃあないかと申したいんです。

公害と同時に私害というものがある、親子夫婦という近い所でお互いが感じておる個人的なものの方が、より深刻なものが多いんです。もっと深刻なのは自害という、自分で自分を害している面が多いんじゃないか。で、考えてみると、そんなに自分を痛めつけんでもいいのに、勝手に自分を害して居る、それでいて、他人から傷めつけられている、障害されてると思っている、そうしたことが非常に多いと思う。表面は冷静な格好をして、外面をつくろいましても、自分の中に起る煩悩、苦しみ、葛藤というものによって、自分が傷められている。その害がはるかに我々の生命の健康にとってよくないことを思うわけです。

そういう時に、あの池山先生のような寂かな姿勢と云いますか、御信徳は、非常に私共を慰められ、やわらげられる。そういうものを与えて下さる感じがします。

私は或る秋、蓮華谷の池山先生から、一度虫の音を聴きに来ないか、と呼ばれて参りました。灯をともして萩の咲くお庭で虫の音を聴いたことがあります。本当にまあ、あんなに、心から鳴く虫の音を聴いたことはありません。

しずけさと云いますと、矢張り先生と二人でむかいあいになって、どちらも物を云わないで、只向い合ってるだけで、何となしに先生から受ける心の放射能—何か感じる、ああいう瞬間というものを思い起すことがある。そうしてその寂けさの中から先生が、お念仏される、仏々想念というのはそういうことかなあと、私時々思うわけなんです。天地の間から調和されるような、今でも印象に残っております。

花田先生のテープの中に動的な先生の晩年の一駒がありましたが、静寂というようなものは大洋のような静けさであるが、それは時によっては怒濤となって動くこともあるんじゃないか、動中の静ということがあります。たとえば先生には色々な社会的、家庭的御不幸がございますが、それらに対してですね、信仰の—何て云いますか、その烈々たる炎というようなものがあって、燃えておる。盤石の信念、併しその中には、非常に静かであって非常に動的な情熱的なものがある。只普通の静けさだけだったら恐らく先生がお亡くなりになって三十何年にもなって、こういうように大勢の方が、先生の徳を慕ってお集りになることは無いんじゃないか。あの先生の寂けさの中に、奥には、信仰

の烈々たる炎が燃えておったと思うわけです。

そういうようなものは、どうも我々人間世界からだけでは仲々出て来にくいではないか、と云うのはイギリスの心理学者のチェッサーという人が

「人生は肉体と情緒と知性と精神とを積み上げて造った四階建の建造物である」

と言っていますが、第一階には感覚、愛欲という世界、次ぎには経済の世界とかそれを越えた色々な世界、倫理道徳の世界などをあげておりますが、最後に精神の世界を挙げている。

我々が順調にいっている時には兎角それに浮かされて仲々倫理道徳の世界まで行かない。ところがいよいよ二進も三進も行かなくなった時に、これじゃいかん、どうにもならんという世界が出てくると、まあ絶望の世界と云うものだろうと思うんですが、その絶望の淵に立った時、何も役立たない。そのどうしてもこうしても断崖で越えることが出来ない、そういう暗黒、絶望というものですね、それを越えたるものを本当の人間、超人間の世界だと思うんです。ヘルマンヘッセが

「神が人間に絶望を与えるのは、その人を殺すためではなく、新しい生命を呼び起すためである」

といっているが、人間が本当に究極の人間であるためには、その最高の第四階の精神の世界というものを見出すことであると思うんです。

我々の中には色々な「顔」があるわけですね。まあ時には善人らしいような事をする、又経済の世界に住むこともあるし、愛憎痴慢の顔もあるんですが、その色々な「顔」の中で、本当の本来の顔というものは何だろうというわけですね。私は前にこんな腰折れを作ったことがあるんです。

もろもろの顔うごめいて喘（あえ）ぎゐる内なる我を
写せる鏡

色々な顔があります、二重三重四重人格、諸々のうごめける顔なる「内なるわれ」—こういう歌を作ってみたんです。

最高の顔と云いますのは、この社会に絶望してそれを越えなければ、この顔は見ることはできない。何かに頼っていたら、それで一寸満足する、これが多かったのですが、「ありそなこと」予想もしなかった不幸とか、二進も三進もいかん人間関係など、そういう絶望こそ、内なる生命、第四の世界を喚びおこす契機、因縁になるかもわからんと思うわけです。

これと同じようなことをベートベンが言っている。これは彼がハンガリーのブダペストから一寸行った所のルジャ

ルジーという所で、綺麗なお嬢さんに恋をしました。ところがそのお嬢さんは音楽好きの伯爵と結婚するということになってベートベンは絶望におちいる。で、そこから有名な「月光の曲」は、静かな古城における月光をロマンチックな情緒で歌い作曲したものといわれております。そのイメージはルジヤルジーだと云われております。彼はそうして、他の事情もあって絶望して遺書を書いて毒を飲もうとしました。そのようにして、死を決してから四日間、苦悩の挙句、そのどん底で、醒めよ、という天の声、神の声を聞いて、彼はその時こんなことを言っている。

「人は絶望の暗黒の中で神の手に触れることができる」と。だから絶望というものは、人間にとって場合によっては—これは決して望むことではないけれども、場合によったら、絶望というものも、念仏申しく超えて行くとき、仏の方便であったと自然に転ずるようである。

そういうことで、我々は日常いろいろな顔がありますが矢張り最も強く、最も高いものは、私共でも、寂かな世界、寂かということ、物に動じないということは、どういうことか。これは、死を超えたこと、死を受け取ったことだろうと思うんです。こういう世界は矢張り宗教、信仰の世界でないかと思うのです。

今、私の目前に、池山先生の御歌

たのまるる、ただ念仏のわれにあり

さるべき業はさもあらばあれ

の軸がかかっています。この業—最悪の業は死だと思いますが、こういう業を、たのみ力になって下さる仏、業を引きうけて下さるのは仏だけである。そう私は思うのです。私のような者でも、池山先生のおそばに居たということで、時々念仏を思い出すこともあるということは、ありがたいことと云わなきやあならぬと思います。

川畑先生のお話が終りました。心に浮かぶままに日頃の信体感を深く広くお味わいの模様を述べて下さって、有難い緊張を続けて参ったのでありました。

ここで例年のように手作りの精進料理で皆さんと一諸に夕食を頂くこととする。飯台を運ぶ、料理のお皿を運ぶ、今までの寂けさが一時に解き放たれて、賑やかな和らぎの声が、悦びの心と映じて彼処此処に湧き出してくる。阿弥陀湯からあがった清爽な着衣場の光景といったところである。沢山の方々が残って下さる。もう私なんか坐るところがない、部屋一杯である。本当に嬉しいことである。

奥の方に一団、白井先生がそこに見える、こっちの方は一杯である。若い女性達がお勝手とお座敷とを運びで参差交叉である。向島諦宣先生が夕方しか出られぬとかねて聞

いていたが、案の上、出席せられた。

食事が終ってから、かねて近くに宿屋を定めて居られた長崎からの人々や、松山市の岡さんのお嬢さん、その外に河岸友春君、佳子さんなどが残って白井先生を取り囲んで坐談を受けて居られる。岡さんのお嬢さんは懸命に先生の法味を聴いて頭を下げている。白井先生も御老齢をもいとわず、長時間お話し下さっている。お疲れが心配である。

ようやく先生を玄関にお送りして、門前までお伴させる、宿泊の人々、宿へ帰る人々、もうあたりは真暗な夜であった。私は疲れて居間に坐りこんで、心だけ走り廻っている。そして床に就いても仲々眠れなかった。

翌朝、十時頃、長崎からの人々が宿からお別れの挨拶に来られる。又法味が交わされるひと時であった。御本山に参拝して帰えると云われるので門外までお見送りをする。

年を重ねると共に、先生の「念仏は自動作用する」との金言が、こうして遠く近く多数の人々が此の寺に、名号碑に雲集されるのを見て、法は真実であること、また法はひとり興らず人によって興る、との事実を、先生の御遺風の内に犇々と体感させられたことである。

今年の一道会はこうして終った。私の七十一歳の報恩講は満身の法悦のうちに終ったのである。どうぞ来年もこの法会に遭えますように念ずるばかりである。

四十六年十二月二日稿了。

安心小話

秀義峰編

一蓮院講師いわく

○

「弥陀をたのむと云うは、本願の月に真向きになりて我心をながめぬことなり」

○

またいわく

「仰せだけて安心せよ。仰せを聞いて、それをわが機へもどして安心せようというは、ふかく弥陀を頼んだのでない。仰せだけで安心して仕舞うのがふかく弥陀をたのんだのじや」

○

伊勢の畳屋藤七いわく。

「凡夫心の兎の毛の先でついたほども間にあわぬことを、はっきり知らせていただくことは甚だ難いことじや」

○

梅逸は有名なる画工なりしが、深く本願を信じて念仏せし人なり。明信老人について聴聞せりという。

この人梅をえがく殊に妙を得たれば、或人、先生の梅は格別気韻たかしと賞讃せしとき、梅逸いわく。

「私が梅をえがくのじや」

「私が梅をえがくのではない。梅が梅をえがくのじや」

念仏詩抄

木村無相

おやじ

おやじどこかと
聞く間もなしに
ここじや　ここじやと
ナンマンダブツ

名のり出ました
ねんぶつ　おやじに
わたしや　あたまが
あがらない

ナンマンダブツ
ナンマンダブツ

うっとりとして

門衛所の文鳥が
春を啼くと

もう
うっとりとして
なんにも
言うことも
書くことも
なくなってしまう

春が来た　春が来た　春が来た

にょらいの生

生きるんだよ
生きるんだよ
どんなに
くるしくても
かなしくても
生きるいのちのなかに

にょらいします

ひとりじやあ
ないんだよ
ひとりじやあ
ないんだよ

なにごとも

なにごとも
なにごとも
如来ほうぞうさま
しっていて
くださる

なにごとも
なにごとも
如来ほうぞうさま
しっていて
くださる
ただそれだけで
死んでゆけ
ただそれだけで

生きられる
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

ゲナ

〃もうなんにも
思うことも
言うことも
いりませんゲナ
如来さまが
たすけて
くださいますゲナ〃

田原のお園の
言葉です

ただ念仏

ただ念仏
ただ念仏
どこまでいっても
ただ念仏
念仏一つ
ただ念仏

ただ念仏
ただ念仏
ゆけはゆくほど
ただ念仏
念仏一つ
ただ念仏

念仏詩抄

幼児（こども）が
カタコトで
話してる
わたしの
カタコト
念仏詩抄

カタコト
あんじん
書くのです

無相よ

無相よ
ていさいをかまうな
かっこよいことを
言わうとするな
書こうとするな、
それよりも
それよりも
よくもわるくも
本音をはけ
本音をはけ
そのときどきの
本音をはけ
本音をはけ

マチガイ

たすかる身になって
たすかろうとする
それはマチガイ
たすからぬ身を
たすくるの御誓願
たすからぬ身に
ナムアミダブツ

昭和四十七年四月一日

新宗教と真宗

花田正夫

和歌山の薗田師発行の「静炬」四〇号に、文部省宗務課の松野純孝氏が、新宗教の立場からの真宗批判と、真宗人の原始真宗教団の精神にかえるように警告せられた一文がある。それを参考にしながら私見を述べたいと思う。

一

新宗教の人々が真宗への非難の最たるものに

「真宗は死後の教えである。それ故現世をあきらめることを教え、現実逃避的である」

とある。

これについては、死んだら浄土といった風に、平生の時に救われていないで、死後の救済をあてよろこびする不徹底な信者の盲点をついたものと思う。他力々々、と云いながら無力におちていることは親鸞聖人の真意ではない。

たとえば、線路上に倒れて身動き出来なくなった病人があるとしよう。そこへ電車が来て、車掌ははやく出よという、病人も出たいのだけれど悲しいことには身動きが出来ぬ、こうした時、そのままでは交通は出来ず、そのまま発車すれば病人は礫殺される。この時、人あって、この病人を見て、その身動きの出来ぬことをあわれみ、身の危険をおかしても救いの手をのべて安全地帯に連れ出して下さるということがなければ解決はない。

生死の苦海ほとりなし
久しく沈めるわれらをば
弥陀弘誓の船のみぞ
乗せてかならずわたしける

生死の苦海におのが罪から沈みきって浮かぶ瀬のないことを、佛かねてしろしめして、弘誓の船、老少善悪の人をえらばず、如何なる愚人悪人をもお見捨てなく、乗せて光明の彼岸に間違いなく渡して下さるところに真宗の救済がある。ここで注意せねばならぬことは、船に乗れば渡して下さると聞かされていても、船に乗せていただいていないでは何の所詮もないことである。ここはよくよく心して聞

かせて頂かねば、新宗教者の言うような力ないものとなってしまう。

次に、現世をあきらめることを教える、とあるが、これも在来の真宗者の中に、何もかも業報まかせというような風潮がある。業報を本当にまかせられるものではない、自分に都合のよいことは自分のせいにし、都合の悪いことは他人のせいにする身勝手な考えがしつこくつきまとうている身としては、普段何事もない間はそう云うておれるが、いざとなると周章狼狽して大苦悩におち愚痴に埋もれてしまう。

業報に随順することが業報を超越出来る道であると聞くが、それは至難の道である。唯この至難の道がひらけるのは、身から出た業苦に沈む外はない我等を飽くまでも矜哀（こうあい）して、我等と一つ身になって下さる大悲心に支えられてはじめて出来るのである。そこに業報を超えさせてもらえるから、あせらずあわてずその業報を処して行ける。それは業報を逃げ廻るのでもなく、また我武者羅に業報と闘争するのでもない、慈光の下に業報に随順して極く自然な無理のない歩みをさせて頂くのである。

次に、生と死とは紙の表裏である、生だけ考えて死を考えない思想は片手落ちであるし、死だけ考えて生に無関係なのも不完全である。生と死を超える道、そこに仏道がある。しかもその不滅な光を現実の生活の上にうけて進むのが往生の大道である。しかし我々は死を拒否し、見ようともしないで、生きることばかりを考えているものだから、生死の両方面を説かれる仏法を死後だけを教えるように思いこんで無用に思う。そしていのちあってのもの種で、死んだらしまい、ローソクの灯が消えるのと同じだと勝手にきめている。ところがそういうように死を軽視し、無視している人が死の渕に立つ時、それこそ悲惨極りのない、大闇黒のもがき死にの外はない。

長塚節という人が喉頭結核という診断を受けて、余命僅かに一年であろうと宣告された時の歌に

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは、常の時なりき

我がいのち惜しと悲しといはまくを恥ぢて思（も）ひしはみな昔なり

とある。

誰かの歌にも、

為すこともなくてこのまま死ぬるかと病める我が友男泣きに泣きぬ

とある。この死をわがこととして受けて往くことの出来るのはこの生死を貫ぬく大悲のめぐみあればこそである。

二

次に、そういう新宗教者の理想、目的をあげよう。

天理教は、世なおしと甘露台の建設。

大本教は、立てなおしによる弥勒世界の建設。

生長の家は、人類光明化運動、地上天国建設。

創価学会は、利善美の強調と、王仏冥合による国立戒壇の建設。

PL教団と世界救世教は、地上天国の建設。

立正佼正会は、常寂光土の建設。

等々である。

以上、共通点は現世の天国化という理想主義である。もしこの理想主義によって人類社会に理想の世界を実現しようとしても、現実の世界にはいつも深刻な苦悩が続いている。科学が進んで便利になり物資は豊富になったが、公害が増大し、歯止めのない物質追求の奴隷となる。原爆が出来たが、全人類はその恐怖におののいている。

政治や経済がどう変革されても地上天国が実現するとは思われない、現に同じ理想のもとにあるソ連と中共の間は、平和で自由なのかと云えば、互に深刻な敵視が続いているのを見てもわかる。

その上に一人一人がどうしてもまぬかれられない、老病死、愛別離苦、怨憎会苦（おんぞうえく）、等々の手のつけようのない苦悩がひろがって、愁歎の声がいたるところにみちている。

ドイツの裡言に「地獄への道は美しい理想の花で飾られている」とある。人それぞれに、国それぞれに無数の理想を掲げてはいるが、現実はいつもそれに反した結果を招いている。

ゲエテは「すべて善良な人は、よくなりたいという無力ではあるが不滅の願いを持つ」と云っている。翼のない小鳥が大空をあこがれて地上をのたうち廻りながら、根気も体力もつきはてて空しく終らねばならぬかなしさを警告するものであろう。

それでは現実のままでよいかというと、そこにも落着くことは出来ない。賢善精進主義がとかく偽善におち、その窮屈さから反撥して自然主義を欧歌しがちで、人間の長い歴史を通じて、理想主義と自然主義の流れが交錯しながら続いているし、これからも絶えることなくくりかえされるであろう。しかしそこには光明はない。最近の仏教書の紹介文に「親鸞聖人は、愚禿と名告り、肉食妻帯して無戒名字の比丘の生活をせられたので、煩悩肯定主義者である」というたものを読み、呆然とさせられた。このままでよいのであれば弥陀の本願は無用である。

本願とは、我等の煩悩は無尽に続き、社会の罪悪ははてしなく重ねられて行く、この我等の煩悩熾盛にして罪悪の深重なことを無限の大悲をもって知りつくされ、それをあわれみ、飽くまでもお見捨のない御真実心である。ここに生死罪濁の苦悩の中にあって、それとはなれぬ大悲心に触れる時、一切の世間から捨てられ、呆れられた囚人が、唯一人の母がどこまでも憐れみの涙を注いで下さることに気づくと、身は刑務所にあるまんま、親のふところに心はおさめられると同様である。我々が実際の生活の場にあって、弥陀仏の大心光の照護を常にこうむることが出来るのである。かくて生死罪濁の身でありながら、浄土返照のひかりを身にうけて、動乱の世にあって、やわらぎやすらうことも出来る。歎異抄に

「わろからんにつけてもいよいよ願力を仰ぎまいらせば自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし」

とあるのはその消息である。これは過去の幻影でもなく未来の夢想でもない、あきらかに現在の事実である。そこには仏の慈悲と智慧をうけて、我々の罪障の氷が功徳の水と転ぜられるのである。

教行信証に聖人は

「大悲の願船に乗じて、光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ず、即ち無明の闇を破し、無量光明土に到りぬれば、大般涅槃を超証して、普賢の徳に遵うなり、知るべし」

と、願力ひとつに導かれて行く時、障り多き身が衆禍の波が自然に転じ行方の闇が破られる我等の信の旅を讃仰していられる。

こうしたたのもしい本願のまことに身心共に満たされてはじめて、近角先生のよく仰言った「お慈悲一つで人生手放し」の妙味もうかがうことが出来る。この道にかなう時古歌の

心のみまことのみちにかないなばいのらずとても神やまもらん

と、冥衆の護持の益を自然に蒙るのである。

× × × × × ×

牛

坂本　遼

……

お鶴がながい間飼うた牛は
おらの旅費に売ってしまうた
おかんとおらは
牽かれていく牛見て涙出た
仏になっとるお鶴よ
許してくれよ
おら神戸へいて働くど

ともしび

聚墨生

無量寿如来に帰命し、不可思議光に南無したてまつる。

（正信偈）

何時までもめざめ得ないで、惑いに迷う我等をあわれんで、如来はいついつまでもはぐくみ護って下さる。どうにもひとり立ち出来ぬ、できそこないの子のために、死んでも死にきれぬ親の悲願が続くように。この大慈悲に帰しまつる時、われらは永遠の心のあけぼのを迎え、人生の四季が夫々に荘厳される。道元禅師は

春は花夏ほととぎす、秋は月、冬雪さえて涼しかりけり

と詠じ、青年、壮年、老年、そして死後までも貫いてその時期相応の妙趣を見出されている。

また事毎に失敗し苦しむ我等をみそなわす如来は、不可思議の智慧の光明をあまねく十方に放って、老少善悪、賢愚貴賤のへだてなく、み胸におさめとって下さる。この如来の知遇に浴しておのずから心やすらぎみたされて、他人の幸福をうらやみ自分は不幸だと歎いていた暗愚さも知らされ、人間に生れたことのよろこびから、与えられた仕事に落着いて打ち込むことも出来、秋の七草が野山を飾るように、人々がその持味を存分に発揮しながら、おのおのそのところを得て、真実の生き甲斐を自然に恵まれる。

池山先生著書紹介

絶対他力と体験

頒布価、送料共、四百円。

本書は大正十一年に、池山先生御自身の信体験を中心とされて出版されたもので、人生の実相とその救済の道を懇切に説かれた書であります。私の六高の学生時代に、知人が姉さんの重病にあい慰安の道も見失って市内をうろついていた時、本書を教えられ、早速姫路の家に帰り、この書を枕元で読み続けた時、姉さんが不思議にも念仏にめざめ往生したと聞かされた。最近「生き甲斐」とか「人間の原点」と、しきりに言われますが、そうしたことを思考せられる人々は是非座右におかれて、生涯の指針を得られますようにお勧めいたします。

信を行く旅人

頒布価、送料共、五百円

本書は大阪の学生の要望によって、堂ビルで歎異抄の講話をせられた時の速記録であります。一章と二章と三章そして十三章を、先生独特な信味をもって語られたものであります。歎異抄の講義の書は沢山ありますが、聖人のおこころを身にうけられてのお味わいは仲々見出し難いものであります。歎異抄を読まれる人々のよい指針であります。

以上の書は、京都市右京区山田開町、浄住寺へ御申込み下さい。

あとがき

新緑風薫の五月となりましたが、近頃は「お守りブーム」とか。経済に、内政に、外交に、世情人心の不安から遁れるものが藁をつかまえずにはいられない心の反映でありましょうか。この機縁に、真実のよるべを恵まれて、禍がかえってしやわせと転じますよう願わずには居られません。

こうした時、東洋文学界に金字塔を建てられた川端康成氏の自殺は人間存在の原点への深い反省をうながされます。明治の中期、一高生だった藤村操の「人生不可解」と言いのこして華厳の滝に身を投じたことは、ことに青年学徒に警鐘を乱打しましたが、川端氏は七十二歳、業成り名を遂げた上での自殺であったが、業縁の催しによっては私共も如何なる振舞いをするかも知れないことを強くしらされました。

× × × × × ×

近角先生は、われよしと執じる信仰の邪定聚の姿をわが御身にかけられて懇切にお説き下さっています。すべて仏法のことは、わかってわからぬところを色々と気づかされます。一応頭でわかっても、それが身についていないということがあります。先生のように実生活の上に仏法をお味い下さる方は稀れでありますだけに、そのお導きは尊いことであります。本年は先生御誕生の百年とか。

福島先生は、人の世に和らぎの光のさしそめる根源をあきらかにして下さいました。けんか性のやまぬ私共の上に慈光を蒙り〳〵念仏の道をたどる有様をおしえられました。

柳瀬様も八十を迎えられ、障りの多い身体をもたれながらお元気に活躍していられます。福島先生はたしか八十四になられたと思いますが、八十路をこえられた方々の言葉は、禅家の「金風体露」と言いますように、秋風に紅葉も散って裸木が陽光を浴びている趣きがあります。

一道会の記は、川畑愛義さんの感話を頂きました。池山先生の最後の日まで医師として、弟子としてよくおつかえ下さった方であります。お念仏をいのちの基盤とされての最近の所感を語られました。

木村無相さんも、病身で冬の寒さは心配ですが、陽春五月ともなりますと、寸暇をさいて旅心にさそわれているとのことであります。

新宗教と真宗の私稿は、理想主義に立つ新宗教と、その反対の自然主義でなく、はてしなく苦悩の続く外ない人生に、仏陀の智慧と慈悲のひかりに浴して、泥田に咲く蓮の花のよろこびを現実生活にいただく特長をのべました。

御案内

○ 毎月第一、二、三日曜午后一時半。
南区駈町二ノ八八、一道会館、例会。
市電、新郊通り一丁目下車。
東入ル、三筋目左入ル。

○ 毎月二十四日、午前・午后。
昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市電御器所通り下車。
市バス北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
一年　八〇〇円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　吉野穂志郎
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光第二十四巻　第五号　昭和四十七年五月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可